慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポリフォニー概念によるフィギュールの分析
Sub Title	Analysis of figures of speech in terms of the concept of polyphony
Author	松尾, 大(Matsuo, Hiroshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.132 (2014. 3) ,p.121- 147
JaLC DOI	
Abstract	When the concept of polyphony (sc. phenomenon in which two or more voice is sounding in text) is applied to figures of speech in general, it will become clear that there are three ways in which the concept of polyphony is related to the figures. 1 In the case of some figures (e.g. prolepsis), polyphony is an essential component of the definition itself. 2 In some figures (e.g. parenthesis), although the definition itself does not contain a polyphonic component, the reference to it is indispensable to the adequate description of the effect. 3 Some figures include a subtype whose description needs a reference to polyphony(e.g. anaclasis). From these it is concluded that the reference to the pragmatic dimension through the concept of polyphony is effective in describing the structure and the effect of many figures of speech and their subtypes. The import of this study is two-fold. That is, while the conventional theory of figures, which is oriented toward syntactics and semantics, is complemented with pragmatic theory, the figures which have not been approached so far through the concept of polyphony are incorporated into the system of the polyphonic theory.
Notes	特集 : 論集 美学・ 芸術学 : 美・ 芸術・ 感性をめぐる知のスパイラル(旋回)
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000132-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポリフォニー概念による フィギュールの分析

松　尾　　大*

Analysis of Figures of Speech in terms of the Concept of Polyphony

Hiroshi Matsuo

When the concept of polyphony (sc. phenomenon in which two or more voice is sounding in text) is applied to figures of speech in general, it will become clear that there are three ways in which the concept of polyphony is related to the figures.

1 In the case of some figures (e.g. prolepsis), polyphony is an essential component of the definition itself.
2 In some figures (e.g. parenthesis), although the definition itself does not contain a polyphonic component, the reference to it is indispensable to the adequate description of the effect.
3 Some figures include a subtype whose description needs a reference to polyphony (e.g. anaclasis).

From these it is concluded that the reference to the pragmatic dimension through the concept of polyphony is effective in describing the structure and the effect of many figures of speech and their subtypes.

The import of this study is two-fold. That is, while the conventional theory of figures, which is oriented toward syntactics and semantics, is complemented with pragmatic theory, the figures which have not been approached so far through the concept of polyphony are incorporated into the system of the polyphonic theory.

* 東京藝術大学教授，慶應義塾大学非常勤講師

1　序

本論文はポリフォニーの概念ないし理論によるフィギュールの分析の有効性と生産性を実証することを目的とする．ここでポリフォニーとは，古くからおなじみの，多声音楽という意味ではなく，それと連関はするが，近年のテクスト分析の手法として開発，洗練されてきた理論における意味，つまり或る言葉が他者の声[1]を響かせるという意味で使われている．一方，フィギュールとはメタファーやアイロニーなど言葉のあやという意味で使われている．

さて，ポリフォニー理論の淵源に位置するバフチンの洞察によれば，どんな言葉もポリフォニー的である[2]．しかし先行研究でポリフォニーとして分析されるのは，そのポリフォニー性がとりわけ目立つケースである．この点でポリフォニーはフィギュールに似ている．どんな言葉もゼロ度の形を持つわけではなく，何らかの個性的な形をしているが，その中でもフィギュールとして認定されるのは，特にその個性的な形が際立っている場合のみであるからである．

さて，フィギュールを分析するにあたって，本論文は，私が共著者の一人である『レトリック事典』[3]のうち私が担当した部分にフィギュールの説明と用例を求める．その理由は二つある．一つは，自分が担当した部分は熟知しているはずである，ということである．もう一つは，フィギュールのなかでもとりわけポリフォニー的性格の強い「論証のあや」[4]が私の担当部分に属することである．

このように「論証のあや」がポリフォニー的性格を強く持つわけは，そもそも論証は，相手の思想，信念，判断などを変更させようとするために，相手がすでに抱いている考え――それには変更しようとする当の考えと，変更の手掛かりとしてこちらが使う，相手がすでに容認している考えとが含まれる[5]――をなんらかの仕方で自分の言葉の中に響かせる必要があることである．むろん『レトリック事典』で挙げられる「論証のあや」

の用例のすべてがポリフォニー的であるわけではない．なぜそうなるかはいずれ稿を改めて論じることとし，本論文ではポリフォニー的である用例を分析し，それらがどういう仕方でポリフォニーであるかを解明する．

次に，ポリフォニーが論証のあやに限られるわけではないことを証明するために，私の担当部分のうち「表現形態のあや」について，それに含まれる用例のいくつかが，やはりポリフォニー論的分析を容れるものであることを示す．

これらからの結論として，フィギュールのポリフォニー論的分析の持つ意義は二つの観点から見ることができることが明らかになる．一つはフィギュール理論への寄与である．『レトリック事典』では，フィギュールは，類型というその性格上，主に形式 —— 語形論的形式，意味論的形式，統語論的形式，論理的形式など——の点から規定，記述，説明されている．言語を関与者との関係で考察する語用論（pragmatics）に属するポリフォニー理論から対象に新たな光を当てることによって，かかる形式論的分析を補完するものと言える．

もう一つは，ポリフォニー理論への寄与という観点である．ポリフォニー理論は先行研究の分厚い蓄積を持つ．その中には特定のフィギュールをポリフォニー的に分析した研究もある．ポリフォニー理論好みの対象であるアイロニーや暗示引用（allusion）など，一つのフィギュールを主題化するものはむろんのこと，対義結合（oxymoron）など数個のフィギュールを論じたコレンの研究のように，複数のフィギュールをポリフォニー的に分析した成果もある[6]．しかし本論文は，論証のあやをはじめとして，これまでのポリフォニー論では取り上げられなかったフィギュールを対象とする点で独自性を持つ．ポリフォニー理論をこれらにも適用可能なものに精錬することによって，その展開にも寄与することになろう．

2 「論証のあや」のポリフォニー的分析

「論証のあや」は，『レトリック事典』で「表現形態のあや」「意味作用のあや」「思考様態のあや」に続く第4部であり，九つの章から成る．これらの章はそれぞれフィギュールのグループを扱うが，これらのグループは，ポリフォニーとの関係という観点からは，以下の三つのタイプに分け得る．

2-1 フィギュールの定義自体にポリフォニーの概念が属するタイプ．「予防論法・仮説論法・一任論法」と「対抗非難・転送論法など」の二つがこれに属する．

2-2 定義は形式の観点で行われるが，効果の記述にポリフォニーの概念が必要であるタイプ．「推論法など」「両刀論法と剰余論法」「メタ語法・引用法など」「設問法など」の四つである．

2-3 そのフィギュール全体としてでなく，それに分類される下位の種がポリフォニー的であるタイプ．「帰納法など」「同義循環など」「異常論法」の三つがここに属する．

以下にこの三つのタイプを順次取り上げる．

2.1 フィギュールの定義自体にポリフォニーの概念が属するタイプ

2.1.1 予防論法・仮説論法・一任論法

2.1.1.1 予防論法

ポリフォニー理論の淵源であるバフチンの『ドストエフスキイ論』においては，他者の言葉を先取りして，あらかじめそれに対応する言葉が，ドストエフスキーの実例に即した説明の中核を占めている[7]．重要なことは，予防的性格は文学テクストに遍在する性格であることである[8]．さらに，すべての談話が受信者（聞き手，読者）を意識し，そのネガティヴな反応をできるだけ小さくする（言い換えればポジティヴな反応をできるだけ大きくする）ことを目指す限りで，予防論法は文学に限られず，その「程度と質」はともかくとしてすべての談話に遍在する[9]．であるとすると，予

防論法は，言語一般の性格が特に顕著に表れた現象として，言語一般を考察する手掛かりとなる．

最初の例を見よう．

> もっとも，こんなことをいうからといって，べつだん，わたしは，諷刺よりもばかばかしい笑いのほうをヨリ高く評価しているわけではない．しかしまたそれと同時に，ばかばかしい笑いよりも，諷刺のほうが，ヨリ高級だと考えているわけでもない．（下線は論文著者，以下すべて同じ）（花田清輝「諷刺とユーモア」『レトリック事典』p. 657）

諷刺とばかばかしい笑いの間に優劣がある，という読者の声に対して，あらかじめ予防線を張っているのが見て取れる．注目すべきは二度現われる「ない」という否定辞である．ポリフォニーには，それを表示する標識（marker）を持つものがある．その種類は多いが，否定表現もその一つである[10]．つまり相手の持つ一定の考えをターゲットに，それを論駁するときに使われる標識である．

第二の例を見よう．

> 食品は溢れているけれど，グルメレストランをたまに利用できる小金はあるけれど，乞食ですらグルメ食品を食べてはいるけれど，しかもアンケート調査をすればほとんどの人が食生活には満足しているといっているけれど，“豊かである”といいきるにはどこかうすら寒いものを感じる．（黒田節子「食文化，食生活，未だ成熟に至らず」『レトリック事典』pp. 657f.）

ここには譲歩という標識が現われる[11]．これは，相手の声をある程度容認している旨を述べることによって，あらかじめ相手の抵抗を軽減しつつ，それと異なる自分の考えも提示する機能を持つ．

2.1.1.2　仮説論法

「仮説論法」には「仮定」と「譲歩論法」の二つが含まれる．「仮定」にはこのような例がある．

賢一郎（昂然と）僕達に父親がある訳はない．そんなものがあるもんか．

父（烈しき忿怒を抑へながら）何やと！

賢一郎（やゝ冷かに）僕達に父親(ちゝおや)があれば，八歳の年に築港からおたあさんに手を引かれて身投をせいでも済んどる．あの時おたあさんが誤って水の浅い処へ飛び込んだればこそ，助かって居るんや．僕達に父親(てゝおや)があれば十の年から給仕をせいでも済んどる．僕達は父親(てゝおや)がない為に，子供の時に何の楽しみもなしに暮して来たんや．新二郎，お前は小学校の時に墨や紙を買へないで泣いて居たのを忘れたのか．教科書さへ満足に買へないで写本を持って行って友達にからかはれて泣いたのを忘れたのか．僕達に父親(てゝおや)があるもんか，あればあんな苦労はしとりやせん．（菊池寛『父帰る』『レトリック事典』pp. 661f.）

父親は生きているではないか，という相手の声に対して，あれは父親と呼べるものではない，と反駁する文である．ポリフォニー標識としては条件文である[12]．この文型は，相手の言い分を仮に認めれば，不合理な帰結が生ずることから，相手の言い分を論破するものである．

「譲歩論法」の例を見よう．

俺に云はせれば，何もかも知つてゐながら，さはらぬ神に祟なしで，もつと悪く云へば，臭いものには蓋で，少しも普段の冷静を失はずにゐる大原が，第一よくないし，三千子さんにだつていろ～云ひ分(ぶん)はある．が，然し，誰を恨むこともない．お前も男なら，男らしく，總ての責任をお前一人の肩に背負ふがいゝ．（里見弴『大道無門』『レトリック事典』pp. 662f.）

相手の言い分をある程度認めつつ，自分の考えを提示するこの文では，下線を施した「が，然し」が譲歩というポリフォニー標識である．

2.1.2　対抗非難・転送論法など

相手の議論に正面からは対応せず，それをはぐらかしたり，そこから注意をそらしたりする論法である．五つの種類がある．

2.1.2.1　対抗非難

ある非難に別の非難をもってこたえる論法である．次の例がある．

邦子　今日は言います．このままだとおかあさんの愚痴で二人とも骨の髄まで腐ってしまうもの．

多喜　（立ち直っている）なにをえらそうに．親に愚痴をこぼさせないようにするのが子のつとめじゃないか．

邦子　夏ちゃんが女学校の先生になれなかったのはおかあさんのせいよ．

多喜　いったいだれのおかげで大きくなれたと，え，なんだって？

邦子　夏ちゃんの学歴は小学中退です．そんな情けない学歴の者をいったいどこの女学校が雇ってくれるというの．夏ちゃんはこの情けない学歴のせいで何度も先生になり損なったんだわ．では，女の子に学問はいらない，学問のある女なんて世間の笑い者だと言って，夏ちゃんを小学からむりやり退学させたのはどこのだれなんですか．

多喜　だれのおっぱいを飲んで育ったとおもっているんだよ，まったく．

邦子　女の子に学問はいらないといったのはだれ？

多喜　せっせとおしめをかえてやった恩も忘れて，そりゃあたしだよ．まさかこういう世の中になるとは知らなかったしさ．夏子の女としての仕合せをおもって……（井上ひさし『頭痛肩こり樋口一葉』『レトリック事典』p.667）

バフチンはドストエフスキー論でポリフォニー的言葉の類型をいくつか挙げているが，その一つが「対話の応答」である[13]．今の例はそれに当たる．

2.1.2.2　転送論法

相手が自分に向けた議論をそのまま相手または別のものに向け変える論法である．次の例がある．

万七　アイタ……．父さんこそ胴慾な！　年に二十四割もの利子を取るなんて，<u>ああもう人間様のやることではない．人間の皮を着た鬼のやることだ</u>．

金左衛門　おまえこそなんじゃ．親にかくれて三十両もの大金を借りるとは

この金仲屋(かねなかや)をつぶす気だな．この無駄遣い野郎め！　ああもう人間様のやることではない．人間の皮を着た怠けものの馬のやることだ．どこへでも行くがいい！

（井上ひさし『金壺親父恋達引――モリエール「守銭奴」による――』『レトリック事典』p.668）

「ああもう人間様のやることではない．人間の皮を着た怠けものの馬のやることだ」は，相手の言葉「ああもう人間様のやることではない．人間の皮を着た鬼のやることだ」を響かせている．

2.1.2.3　相対論法

悪いものをいっそう悪いものと比較することによって，その悪さを小さく見せる論法である．

事実，人類史上で犯された残虐行為の大半は国家その他の集団への忠誠心によってもたらされたものであって，これに比すれば，個々人の私的エゴイズムによってひきおこされた残虐行為なぞ，実に微々たるもので，物の数にも入らない．

（竹内芳郎『文化の理論のために――文化記号学への道――』『レトリック事典』p. 671）

ポリフォニー標識の一つに比較があるが，この例では「これに比すれば」がそれに当たる．ブレスによれば，この標識は，相手の言い分をある程度取り込みつつ，自分の主張を，より関与性が高いものとして提示するときに使用される[14]．今の例では，個人の残虐行為を問題視する相手のいうことも一概に否定できないが，議論上の関与性は国家などの集団による残虐行為の方が大きい，と主張している．言うまでもなく，とりこまれた相手の言い分によってポリフォニーが生じている．

2.1.2.4　ひらきなおり論法

相手の非難していることを，欠点として認めるが，より大きな美点が伴うことを示して目立たなくする論法である．次がその例である．

> 滑稽記者は小心翼々である，狭量不貸（ふたい）である，其筆（そのふで）は過激痛酷である，小心なればこそ斯（か）る記事を編輯するなれ，狭量なればこそ斯る新聞を起こしたるなれ，過激なればこそ幾分の効を奏しつゝあるなれ，〔……〕
>
> （宮武外骨『予は危険人物なり』『レトリック事典』pp. 671f.）

相手の言い分を提示したうえで，その議論上の方向を反転させる点でポリフォニー的である．標識名としては，ブレスらは「確認」（confirmation）と呼んでいるが，彼の出す例文は「だからどうしたと言うのだ」という趣旨のものであるから，むしろ「開き直り」と呼ぶのがふさわしい[15]．

2.1.2.5　通過論法，論議拒絶〔黙殺〕

それぞれ相手から提起された話題を避ける論法，提起された話題について議論するのを拒む論法である．バフチンの言う「対話の応答」としてポリフォニー的である．いかに相手の論点や発言自体を無視していても，それはそういう仕方で相手の声に対応しているのである．

2.2　定義は形式の観点で行われるが，効果の記述にポリフォニーの概念が必要であるタイプ

2.2.1　推論法など

2.2.1.1　推論法

先行研究には，推論法をポリフォニーとする三つの説明が見いだされる．

A　結論は前提より疑わしいので，読者における二つの見解の共存を表示する[16]．

B　前提は結論より異論の余地が少なく，発話に予在するので，異なる視点を表わす[17]．

C　推論の準拠する規則が共有財として自分以外の声に属する[18].

次の用例の推論法にどの説明が適合するか見よう.

私は最悪の事態を待っていた．最悪の事態は待たれるのが大嫌いである．それは来なかった.（『ダニノスコープ』『レトリック事典』p.612）

2番目の文が大前提であるが，これは疑似ことわざ[19]として設定されている[20]. したがって不特定多数の人びとを発話者として前提する形を取る. したがって上述の説明Cによってポリフォニーとなる.

2.2.1.2　対比暗示推論法

「いわんや」の文型で，次の例がある.

畜生もなほ恩を忘れずして恩を返し報ゆ．何ぞいはめや義人にして恩を忘れめや.（景戒『日本霊異記』『レトリック事典』p. 616）

「畜生もなほ恩を忘れずして恩を返し報ゆ」は，前提であるから，帰結より前に相手が容認しているものとして設定されている．したがって説明のBによってポリフォニーである．また，「あるものが，より少なく帰属するものに帰属しているならば，より多く帰属するものにも帰属する」というトポスが潜在的前提となっているが，これは発話者と受信者が共属する言語・解釈共同体全体の声であるから，理由Cによってもポリフォニーとなる.

2.2.1.3　理由づけ

或る陳述のあとにその理由を付加する論法の例としては，次のものがある.

よいかね，大事にもてなすように．彼らは現代世相の縮図，手短な年代記だからね.（『ハムレット』『レトリック事典』p. 617）

理由追加は，結論の理由について尋ねる相手の声に呼応する点でポリフォニー的である[21]．この例では，なぜ「大事にもてなす」必要があるかというポローニアスの声に対応している.

2.2.1.4　格言

神父というのは，のっぺりと穏やかで，去勢されたような男ばかりではないかと思っていたが，山口神父をみるとそうでないことが，しみじみわかってくる．ただしこの男は，信者の婦人達からは評判がよくなかろうかと思われた．どこからみてもデリケートなところがない．相馬に対するような場合は別として言い方が率直すぎる．女というものは（例外はあるが）本当のことをそのまま言われるのがどうしても許せないらしい．（曾野綾子『花束と抱擁』（新潮文庫）新潮社，1984「箱を覗く」『レトリック事典』p. 618）

「女というものは（例外はあるが）本当のことをそのまま言われるのがどうしても許せないらしい」によって例示される格言は，世間一般の声として設定されているから，推論法がポリフォニーとなる上述の説明Cによってポリフォニーである．

2.2.2　両刀論法など

2.2.2.1　両刀論法

二つの選択肢しかなく，そのいずれからも同じような帰結が導き出されるとする論法である．その例

悲しきかな，君の御為に奉公の忠を致さんとすれば，迷盧（めいろ）八萬の頂（いただき）よりもなほ高き父の恩たちまちに忘れんとす．痛ましきかな，不孝（ふけう）の罪を遁（のが）れんとすれば，君の御為には，すでに不忠の逆臣（ぎゃくしん）ともなりぬべし．進退（しんだい）これ窮（きは）まれり．是非いかにも辨（わきま）へ難し．

（『平家物語』巻二，五「教訓の事」付「烽火の事」『レトリック事典』p. 628）

において，忠と孝をそれぞれ勧奨する二つの声が他者のものとして設定され，それの間で選択できない者として重盛が描かれる．ポリフォニー標識としては，既述の条件文が二つ出ている．

第二の例

しかし，アルビツィの姓を持つジュリアは，誰とでも結婚するわけにはいか

ない．だが，結婚できる階級の男たちは持参金もない娘を嫁にする時代ではなかった．（塩野七生『愛の年代記』『レトリック事典』p. 629）

においては，別々の主体に帰属する二つの声が並べられ，そのそれぞれが理由として機能しているが，それぞれが世間の常識としてポリフォニーを形成する．上述の説明Ｃに当る．

2.2.2.2　残余論法

全体をいくつかの部分に分け，他はすべて否定されるので，一つの部分しか残らないと結論する論法である．

その例

氏は最初から自分の為にも文学の為にも書かなかつた．批評家の為にも作家の為にも書かなかつた，ただ一般読者の為に書いて来た作家なのだ．（小林秀雄「菊池寛論」『レトリック事典』p. 631）

において，否定というポリフォニー標識は，これらが付けられた見解が他者の声であることを表示している．この排除的性格は，特に残余論法の一種である「背理論法」で強くなる．相手の言っていることを仮に認めると，そこからとんでもない結論が導かれることを示すことによって，相手の言っていることを斥ける場合，相手の声は条件部分で響いている．

2.2.3　メタ語法・引用法など

2.2.3.1　メタ語法

他の言葉を取り上げ，それについて語る言葉である．「他の言葉」を対象言語と呼ぶが，それが自分の言葉である場合と，他者の言葉である場合とがある．このうち，他者の言葉について語る言葉がポリフォニー的であることは自明であろう．例えば

「しばしこの事はてて」，「同じくはかの事沙汰しおきて」，「しか〜の事，人の嘲（あざけり）やあらん，行末難なくしたゝめまうけて」，「年来もあらばこそあれ，

その事待たん，ほどあらじ．物騒がしからぬやうに」など思はんには，えされぬ事のみいとゞ重なりて，事の盡くる限もなく，思ひ立つ日もあるべからず．（吉田兼好『徒然草』第59段『レトリック事典』p. 642）

という文では，四つの他者の声が，談話主体の言葉に取り込まれている．

では対象言語が自分の言葉である場合はどうであろうか．一見自分の言葉について自分が語るのであるからである，他者は関与しないように見える．しかし，このような場合も，発話者の談話について補足説明を望む受信者の声に答えるという点でポリフォニーとなる．次の例でこのことを示そう．

私が羅臼を訪れたのは，散り残ったはまなしの紅い花弁と，つやつやと輝く紅いその実の一緒にながめられる，九月なかばのことでした．今まで，はまなし（はまなすと呼ぶのは誤りだそうです）の花も実も見知らなかった私にとり，まことに恵まれた季節でありました．（武田泰淳『ひかりごけ』『レトリック事典』p. 642）

カッコに入れられた部分がメタ語法であるが，自分が用いた「はまなし」という語について，一段上の階梯からコメントを付け加えている[22]．それは「はまなす」の誤記ではないかという読者のクレームを先手を打って封ずるためである．何が他者の声であるかは言うまでもなかろう．

2.2.3.2　引用法

他の言葉を引用対象（引用元）として対象化する言葉である．引用符を伴う直接話法のみならず，およそすべての話法（間接話法，自由間接話法 ……）は，他者の声を自分の談話に取り込む手段であるから，常にポリフォニーとなる[23]．いちいち例を挙げるには及ぶまい．

2.2.4　設問法など

疑問文だが，相手に尋ねることよりも，むしろ強調，非難など独特の調

子を主張に与えること，あるいは問題の提示自体を目的とした表現である．ホワイトによれば，設問法（彼の用語法では修辞疑問）に属する二つのタイプはいずれも「対話的」である．第一のタイプは，ある命題を可能な立場の一つだけとして提示するものである[24]．次の例がこのタイプに属する．

> それでは，何故に「名はわざと省くが」という一句が書かれたのであろうか．それは事実に虚構の趣を添えるためではなく，虚構に事実らしい外観をあたえるために書かれたのか．（花田清輝「『ドン・キホーテ』註釈――セルバンテス――」『レトリック事典』p. 652）

ここでは，ある一句が書かれた理由として「虚構に事実らしい外観をあたえるため」が可能な見解の一つとして挙げられる．ということはつまり別の見解も想定されているということであり，それが「他者の声」となる．

ホワイトが挙げるもう一つの設問法のタイプは，自明なことなので，疑問の形で述べれば，受信者が容易に答えを補えるものである．次がその例である．

> 子供心にとって，自分の家の玄関，あるいは門の前にやってくる黄昏は，少しばかり神秘的な味がする，捉えどころのないものではないだろうか？　そこでぼんやり，一人ぼっちで立っていたりすると，いくらかの怖ろしさと懐かしさが奇妙に入り混った，そしてそのためかふしぎに情緒的なものとなった，一種の困惑のようなものが，胸の底から湧いてきたりしないだろうか？（清岡卓行「萌黄の時間」『アカシヤの大連』『レトリック事典』p. 651）

ここで読者は「捉えどころのないものである」「湧いてきたりする」という答えを容易に補えるが，それは，この見解が一般的通念に属するものであるからである．そしてこの一般的通念が他者の声としてポリフォニーを構成する[25]．

2.3　フィギュール全体としてでなく，それに分類される用例のいくつかがポリフォニー的であるタイプ

2.3.1　帰納法など

特殊によって一般を明らかにする論法である．ポリフォニーである例としては次のものがある．

> 親の押しつける女房を神妙にもらい，三, 四人の子供の父で，夜が明ければ朝で，日が暮れれば夜で，お正月で，お盆で，宿院さまのお祭で，それで相済みとなる一生なら，どこかそこいらの溝（どぶ）へ蹴たぐりこんでも，決して惜しくはない気がした．（野上弥生子『秀吉と利休』五『レトリック事典』p. 621）

「親の押しつける」から「一生なら」までの前提が，そのあとにある帰結の理由となっている限りで，2.2.1.3 で述べた理由づけと同じ理由でポリフォニーとなる．つまり，仮想的聞き手が「どうして惜しくはない気がした」のか，という疑問を抱くことを想定した紀三郎の帰納法と見れば，その聞き手の声が他者の声となる．また全体を自由間接話法と見れば，紀三郎の声の表現だが，語り手の叙述と見れば，語り手の声の表現となり，曖昧さゆえのポリフォニーを形成する[26]．最後に，著者が語り手 and/or 登場人物の声を響かせている点でもポリフォニーである[27]．

2.3.2　同義循環など

2.3.2.1　同義循環

説明されるべきものと同じような意味の語（句）が，説明するものの中にも用いられているため，形式的には循環が生じている論法である．例には以下のものがある．

> この断簡化，断続，全欠等は，定家の身に添ってみようとしている筆者としても，あたかも突如として乱気流のなかに突入，あるいは真空状態のなかでの急降下のような目に遭わされるかの感を与える．
>
> けれども，要するにないものはないのであって，飛び石のようにして記事の

存する日を辿り，またその他の文献，あるいは歌の詞書などによってつないで行くよりほかに，仕方はないのである．（堀田善衛「定家明月記私抄　続・八」『波』1986 年 8 月号『レトリック事典』p. 634）

下線部が同義循環であるが，「ない」ことを問題視する読者の声を響かせた上で，だからどうしたというのだ，ないものはないと認めるしかないじゃないか，と開き直っているから，その際の読者の言い分――「ない」のは問題ではないか――が他者の声となる．

2.3.2.2　循環論法

証明されるべきものと同じような意味の語（句）が，証明するものの中に用いられているため，形式的には循環が生じている論法である．

多田さん，文部省へ行って僕の藝術院新会員をことわって来て下さい．

困りましたな．何と云ってことわるのですか．

院長の高橋誠一郎さんにお目に掛かって，御好意は誠に有難いが，お引き受け致し兼ねるからおことわりすると云って下さい．

なぜお引き受けにならないのです．

なぜと云へば，いやだから．

なぜいやか，と云へば気が進まないから．

なぜ気が進まないかと云へば，いやだから．

多田さん，言ふ事はこの範囲にとどめ，これから外へそれてはいけないよ．

（内田百閒「柵の外」『レトリック事典』pp. 637f.）

下線部前半では「なぜいやか」という相手の声が，後半では「なぜ気が進まないか」という相手の声が，それぞれ他者の声として響かせられている．

2.3.3　異常論法

論理性が欠如した論法である．

2.3.3.1　誤謬推理，欺瞞推理

論理性が欠如している推理である．多くは健全な論理の形を装いつつ論理的誤りを提示するものであるから，バフチンが典型的なポリフォニーの一つとしたパロディーに属する[28]．次はその一種「四個概念（の虚偽）」の例である．

> 理想的兵卒は苟(いやし)くも上官の命令には絶対に服従しなければならぬ．絶対に服従することは絶対に批判を加えぬことである．即ち理想的兵卒はまづ理性を失はなければならぬ．（芥川龍之介『侏儒の言葉』「兵卒」『レトリック事典』p. 679）

「AはBである．BはCである．したがってAはCである」という健全な定言三段論法を他者の声としている．また，大前提「理想的兵卒は苟(いやし)くも上官の命令には絶対に服従しなければならぬ」は，『軍人勅諭』などで普及していた，当時としては共有された声を響かせていると考えれば，この点でもポリフォニーとなる．

次の例は，前提から帰結しない結論を語る「非帰結」である．

> Xは俺の話を聞いてつまらな相な顔をした．俺も仕方がないから，つまらな相な顔の真似をした．
>
> 「そいで，如何しても読まないといふんだな」
>
> 「どうせスカされるんだ，いやなこつた」
>
> 「ぢや勝手にしろ，馬鹿」
>
> もちろん俺は，其夜家に帰り，炬燵に火を入れ，南京豆をたべ乍ら，ひそかにラジゲを読み始めたのである．一体がさもしい根性からだ．（小林秀雄「からくり」『レトリック事典』p. 680）

あるもののあとに続くものについて，ある言語・解釈共同体に属する成員は同じ予期を持つ．その予期を生むのが常識である[29]．小説が詰まらないという前提からは，それを読まないという帰結が生ずるということが，そういう常識として表層レベルに設定されていることが，今の例を味わう

前提として機能している．他者の声として響いているのは，そういう常識である．

2.3.3.2　ちぐはぐ（とんちんかん）

推理以外の言述において，その各部分の論理的連関を外したものの言い方である．次の例では下線部がそれに当たる．

> わたしは煙草をよく喫う．毎朝，目を覚すたびに，己れの口中に一夜のうちにたまった不快この上もない苦味に辟易し，おのが吐く息の煙草の脂臭（やにくさ）さに卒倒しそうになって，その時はつくづく煙草がいやになる．そこで毎朝，禁煙を決心するのだが，この決心も机に向うまでしか永保ちしない．仕事を始めるとなんとなく不安になって<u>藁にでもすがりたい心境に陥る．だが生憎なことに藁はなし，そこで煙草にすがってしまうのである</u>.
>
> （井上ひさし『家庭口論』『レトリック事典』p. 676）

『レトリック事典』の説明は「比喩的意味で使われている成句の「藁」を，次に字句通りの意味で用いて，話題をずらしている」である．ポリフォニー論的観点からは，アイロニーを，一つの発話に対する正しい理解と正しくない理解の二つがそれぞれ別の主体に割り振られるケースとする説明を転用して説明できよう．そのアイロニー理論によれば，例えば，飲みに行きたがる夫に対して「行けば！」と妻が言う場合，飲みに行くことを勧める額面通りの理解は，妻とは別の仮想的発話者に帰せられ，アイロニカルな理解が妻に帰せられるという仕方でポリフォニーとなると説明される[30]．額面通りの理解を語り手に，そうでない方の理解を誰か別の者に帰するという逆転操作をこの説明に施せば，ここでの「ちぐはぐ」の説明になる．つまり「藁」について正しく理解する別の者と，不合理な理解をする語り手の二人の声が響くものとして，上の用例はポリフォニー的に記述しうる．

3 「表現形態のあや」のポリフォニー的分析

本章では，ポリフォニー概念の適用範囲が「論証のあや」だけに限られないことを証明するために，『レトリック事典』の第1章「表現形態のあや」のいくつかのフィギュールにもそれが適用可能であることを実証する．それらのフィギュールとポリフォニーの関係は，第2章で扱った「論証のあや」とポリフォニーの関係の三つの類型のうち，第三のもの（2–3）と同じである．すなわち，それらのフィギュールの下位の種がポリフォニーである．

3.1　狭義の代換

語（句）が平常表現で占める統語上の位置とは異なる統語上の位置を占める表現である．あやどられた表現と並んで，常識的な表現の方も顕在化する場合，ポリフォニーとなる．

> そこで，私は中野に，きみ知ってるか，きみやぼくの不幸はシュルレアリスムに出くわさなかったことだとだれかが書いていたのを，と云うと，中野は笑い，秋山も伊藤も笑った．それは，<u>われわれがシュルレアリスムに出くわさなかった</u>ことが不幸なんではなくて，<u>シュルレアリスムがわれわれに出くわさなかった</u>ことが不幸だったんだという私にある想いが，その場にいたみんなにもあったからだろう．（小野十三郎「私のなかの瀧口修造――『シュルレアリスムのために』をてがかりに――」『本と批評』一九八〇年二月号『レトリック事典』pp. 103f.）

第一の下線では常識的な表現が，第二の下線ではあやどられた表現が表示されている．言うまでもなく常識的な表現の方が他者の声としてポリフォニーを構成する[31]．ポリフォニー標識としては，「不幸なんではなくて」という否定表現が使われている[32]．バフチンの言うように，このポリフォニーは通念的な思考，表現を「打ち倒す」[33]ように作られている．

3.2　類音語接近

類音語を近づけて用いることによって，音は（あまり）変わらないのに意味が大きく変わるという面白味を生む表現である．

「おう，あの女にゃあ，れっきとした間夫（まぶ）のあるのを知ってるか？」

「ああ」

「だれでえそいつは？」

「おれ」

「なにい！？」

「おれ」

「汚（きたね）え間夫だなあ．おい，おめえは間夫ってえ面（つら）じゃあないよ．虻（あぶ）ってえ面だよ．おめえみていにそんな薄よごれた間夫じゃあねえやい．もっといい男の金箔（きんぱく）付きの間夫があるんでい」

「おれのほかに男がいるてえのはおもしろくねえな，おい．だれだそいつは？」

（三代目　三遊亭円之助《近江八景》『レトリック事典』p. 155）

バフチンが「対話の応答」と呼ぶものとしてポリフォニーである．「間夫ってえ面（つら）じゃあないよ」の部分は，「間夫」という相手の使った語を響かせることと，否定という標識とによってポリフォニーが強調されている．

3.3　異義反復など

語句が反復され，それぞれで意味が異なる表現である．

3.3.1　異義反復

はっきりと異なる意味で語を反復する表現である．その中でも，相手が使った語を別の意味で反復するタイプでポリフォニー性は顕著である．

「おまえは私の死を待っている」とプロクレーイユスは息子を責めた．すると息子は「待ってはいない」と答えたので，父は「頼むからせめて待っていて

くれ」と言った.（クィンティリアヌス『レトリック事典』p. 165）

「対話の応答」（バフチン）としてすでにポリフォニーであるが，第二，第三の「待つ」には，それぞれ先行する用例の「待つ」が響いている点でポリフォニー性がさらに際立たせられている.

3.3.2　拡縮反復

論理学上の規則である同一律（A＝A）を見かけ上は肯定または否定する表現である．その中でも否定形のものはポリフォニーとなる.

彼らと結ぶ和平は，和平などではなく，隷従契約なのだ.（『ピリッピカ』『レトリック事典』p. 169）

第一の「和平」は，その使用責任を他者に帰属させ，第二のそれは自分が引き受ける点でポリフォニーである.

3.4　異義兼用など

一回しか表記または発声されていない語音が二つの別の意味を表象させる表現である.

3.4.1　同一語による《異義兼用》

犬の世界で最も幅のきくのは各種の品評会の優勝犬と，この警察犬である．おれはこういう風潮をあまり好ましいとは思っておらぬ．なぜかといえば，品評会も警察も人間の世界に属する催しであり，組織である.〔 …… 〕したがって平吉のようにそう簡単に警察犬をありがたがるわけには行かないのだ．たかが警察のイヌではないか.（井上ひさし『ドン松五郎の生活』上『レトリック事典』p. 176）

比喩的意味での使用を成句として一般の声とし，字句通りの意味を自分の使用として主張するポリフォニーである.

3.4.2　かすり（しゃれ）

もとの語句をもじった表現である．したがって元の語句とかすりとで，構造的にポリフォニーとなる．

> 無為は友を呼ぶ．いざ無為の交わりだ．無為義無為識無一物．六日の菖蒲無為無冠．無為の奥山今日越えて．来たれ無為転変．来たれ転変無為．無為千載に残すともたったひとりのゴドー待ち．（筒井康隆『虚人たち』『レトリック事典』p. 183）

この例では，衆知の成句や格言が他者の声として響いている．

結

序で述べたように，本論文の意義はフィギュール論とポリフォニー論双方への寄与を目指す点で二重である．前者について言えば，第2章はポリフォニー概念を「論証のあや」に適用することによって，この種のフィギュールがポリフォニー性を強く持つことを明らかにした．これは，形式論的方位を持つ従来のフィギュール分析を語用論的に補完する点で，フィギュールの考察に厚みを加えるものである．また第3章は「論証のあや」以外のフィギュールにもポリフォニー概念を適用することによって，フィギュール論全体への寄与をポリフォニー概念が射程として持つことを示した．

一方でポリフォニー論の方も，多様な姿を見せる各種のフィギュールにそれを適用可能なものにすることによって，その精度を上げることができた．アイロニーにおけるポリフォニーの反転したものとして「ちぐはぐ」のポリフォニーが説明できることを示したことがその一例として挙げられよう．

註

[1]「ポリフォニー」とは語源的に〈多くの声〉を意味するが，それが自分の声と

他者の声との複数性であることは，ポリフォニーの別名である heteroglossia が語源的に〈他者の声〉を意味することがすでに示している．

[2] Bakhtin, 1981: 337f.; Bakhtin, 1982: 293; 354.; Bakhtin, 1986: 72; バフチン，1988: 169; 173.

[3] 佐藤信夫・佐々木健一・松尾　大『レトリック事典』大修館書店，2006．以下『レトリック事典』はこれを指す．

[4] 今後の論述において，「論証のあや」のように，引用符に囲まれたレトリック用語は，原則として『レトリック事典』の用語法に準拠している．

[5] 説得が，相手の容認するなんらかの考えに基づいてのみ可能となることについては Fish, 1980: 296f. 参照．

[6] Koren, 2008.

[7] バフチーン，1968: 296; 301 など．

[8] バフチーン，1968: 284.

[9] Hyland, 2001: 551; Hyland, 2005: 90; Hyland, 2008: 3; Keller, 2005: 57.

[10] Breivega/Dahl/Flottum, 2002: 223; Ducrot, 1973: 123f.; Fløttum, 2009a: 270; Fløttum, 2009b: 11; Lee, 2008: 94; Nølke, 1999; Webber, 2004: 181; ヴァインリヒ，1984: 81f.

[11] Anscombre/Ducrot, 1977: 28f.; Fløttum, 2009a: 270; Fløttum, 2009b: 11; Jørgensen, 2002: 61f.; Moeschler/de Spengler, 1982: 4.

[12] Bres, 1999b: 41; Toska, 1999.

[13] バフチーン，1968: p.288.

[14] Bres, 1999b: 36.

[15] Bres/Nowakowska, 2009 が（9）とする類型．

[16] Toska, 2011.

[17] Bres, 1999a: 54.

[18] Donaire, 2009: 85; 89.; van Gils, 2009: 248.

[19] Greimas, 1970: 309; Grésillon/Maingueneau, 1984: 113; Jørgensen, 1999: 7.

[20] ディズレーリの小説『ヘンリエッタ・テンプル』の登場人物フェルデナンドの言葉「われわれが予期することはめったに起こらない．われわれが最も予期していないことが，一般に起こる」と述べている」が名句として人口に膾炙しているが，これをひねっているらしい．

[21] Gjerstad, 2010: 5.

[22] Prince, 1980: 15 はこのようなコメントを上位の正当化（over-justification; surjustification）と呼んでいる．

[23] 引用をポリフォニーとする理論としては Vlad, 2006: 207f.; Seppänen, 2011: 51

がある．

[24] White, 2003: 9.

[25] White, 2003: 9–10.

[26] Fowler, 1986: 138f.; Lips, 1926: 57–59; Nølke/Olsen, 2000: 116f.; Nølke/Olsen, 2002: 141.

[27] バフチン，1968: 287 では「語り手の叙述」がポリフォニーとされている．

[28] バフチーン，1968: 279f.

[29] Olsen, 2002: 150; Thompson/Hunston, 2000: 9f.

[30] Ducrot, 1984: 210f.; Pérennec, 2011: 7.

[31] なお，この考えをさらに進めれば，すべてのフィギュールは常識的表現を他者の声とするポリフォニーであるという考えに行きつく．Detrie, 2000: 167 参照．

[32] なお，この種のポリフォニーは，構成の反復に属する多くのフィギュールに共通である．例えば「太った豚になるより，痩せたソクラテスになれ」という言い方では比較という標識によって，「生きるために食べるべきであり，食べるために生きるべきではない．」という名句では否定という標識によってポリフォニーが表示されているが，いずれも世間の有力な通念を他者の声として響かせている．

[33] バフチーン，1968: 282.

文献

Anscombre, J. C./Ducrot, O. (1977), “Deux *mais* en français?”, *Lingua* 43, 23–40.

Bakhtin, Mikhail Mikhaïlovich (1982), *The dialogic imagination: four essays*. Ed. by Michael Holquist. University of Texas Press.

Bakhtin, M. M. (1981), “Discourse in the novel”, in Holquist M. (ed.), *The Dialogic Imagination*, Austin, University of Texas Press: 259–435.

Bakhtin, M. M. (1986), *Marxism and the Philosophy of Language*, translated by Ladislav Matejka and I. R. Titunik(Academic Press, New York.

Breivega, K. R./Dahl T./Flottum K. (2002), “Traces of Self and others in Research Articles. A Comparative Pilot Study of English, French and Norwegian Research Articles in Medicine, Economics and Linguistics,” *International Journal of Applied Linguistics*, 12:2, 218- 239.

Bres, Jacques (1999a), “Entendre des voix: de quelques marqueurs dialogiques en français,” Bres, J./Delamotte, R./Madray, M./Siblot, P., *L’autre en discours*,

191–199.

Bres, Jacques (1999b), „Vous les entendez? Analyse du discours et dialosisme," *Modèles linguistiques* 20: 2, 71–86.

Bres, Jacques/Nowakowska, Aleksandra(2009), "Sourires de chat sans chat: discours rapporté et dialogisme interlocutif anticipatif," Communications du IVe Ci-dit Colloque international, Nice 11–13 juin 2009.

Detrie, Catherine (2000), „La figure, une „parole parlante" au plus près du monde vécu," *Cahiers de Praxématique* 35, 141–169.

Donaire, María Luisa(2009), "Stéréotype et point du vue," Leeman-Bouix, Danielle (dir.), *Des topoï à la théorie des stéréotypes en passant par la polyphonie et l'argumentation dans la langue*, 83–96.

Ducrot, O. (1973), *La preuve et le dire*. Paris: Mame.

Ducrot, O. (1984), *Le dire et le dit*. Paris: Minuit.

Fish, S. (1980), *Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretive Communities*. Harvard University Press: Cambridge,Mass. and London.

Fløttum, Kjersti (2009a), "Academic voices in the research article," Suomela-Salmi, Eija/Dervin, Fred, *Cross-Linguistic and Cross-Cultural Perspectives on Academic Discourse*. 109–122.

Fløttum, Kjersti (2009b), Argumentation through author presence and polyphony in the genre of the research article. http://aic.uib.no/texts/flottum.pdf (2009.02.18.).

Fowler, R. (1986), *Linguistic Criticism*. New York/Oxford, OUP.

Gjerstad, Øyvind (2010), "La polyphonie discursive: les voix de la langue et de l'interaction," Colloque international Dialogisme: langue, discours, septembre 2010, Montpellier.

Greimas, A. J. (1970), *Du sens. Essais sémiotiques*. Paris.

Grésillon, Almuth/Maingueneau, Dominique (1984), "Polyphonie, proverbe et détournement. Ou: Un proverbe peut en cacher un autre" *Langages* 73, 112–125.

Hyland, Ken (2001), "Bringing in the Reader: Addressee Features in Academic Articles," *Written Communication* 18: 4, 549–574.

Hyland, Ken (2005), *Metadiscourse. Exploring Interaction in Writing*. Oxford: Continuum International Publishing Group Ltd.

Hyland, Ken (2008), "Persuasion, Interaction and the Construction of Knowledge: Representing Self and others in Reseach Writing," *International Journal of*

English Studies 8: 2, 1–23.

Jørgensen, K. S. R. (1999), „Stylistique et polyphonie,“ *Tribune* 9, 21–36.

Jørgensen, K. S. R. (2002), “Le connecteur *mais* et le discours indirect libre,” Olsen, M. (ed.), *Polyphonie——linguistique et littéraire/Lingvistisk og litterær polyfoni* 4, 57–76.

Keller, Reiner (2005), *Wissenssoziologische Diskursanalyse: Grundlegung eines Forschungsprogramms*. VS Verlag fuer Sozialw.

Koren, Roselyne (2008), “Figures et points de vue,” Langue Française, 160, 3–19.

Lee, Sook Hee (2008), *The use of interpersonal resources in argumentative/persuasive essays*. VDM Verlag.

Lips, Marguerite (1926), *Le Style indirect libre*, Payot, Paris.

Moeschler, J./de Spengler, N. (1982), “La concession ou la refutation interdite: approches argumentative et conversationnelle”, *Cahiers de linguistique française* 4, 7–36.

Nølke, H.(1999), “La polyphonie: analyses littéraire et linguistique,” *Tribune* 9, 5–19.

Nølke, Henning/Olsen, Michel (2000) “POLYPHONIE : théorie et terminologie,” Olsen, M. (ed.), *Polyphonie——linguistique et littéraire* II, 45–177.

Nølke, Henning/Olsen, Michel (2002), “*Puisque* : indice de polyphonie ?,” *Faits de langues no 19. Le discours rapporté*. Éd. Laurence Rosier. Ophrys, Paris, 135–146.

Olsen, M. (2002), *Remarques sur le dialogisme et la polyphonie*.(Polyphonie——linguistique et littéraire VI.) Roskilde University Centre.

Pérennec, Marie-Hélène (2011), Das Konzept der Polyphonie als Instrument der Textinterpretation. http://langues.univ-lyon2.fr/sites/langues/IMG/pdf/doc-190.pdf (2011.4.8.).

Prince, Gerold (1980), “Introduction to the Study of Narratee,” Tompkins, Jane P. (ed.), *Reader-Response Criticism*. Johns Hopkins U. P.: Baltimore/London, 177–96.

Seppänen, Anna (2011), La polyphonie linguistique dans le discours journalistique——Le cas France Télécom.

Thompson, G./Hunston (2000), S., “Evaluation: An Introduction,” Hunston, S./Thompson, G. (eds.), *Evaluation in Text*, 1–27.

Toska, Bledar (2011), The Dialogical Identity of Pragmatic Markers in Political Argumentation. http://www.tu-chemnitz.de/phil/english/ling/download/

talks/Toska_ESSE10.pdf(2011.1.26.).

van Gils (2009), Lidewij Wilhelmina, Argument and Narrative: A Discourse analysis of ten Ciceronian speeches.

Vlad, Daciana (2006), "Sur quelques marqueurs polyphoniques a valeur polémique," Florica Hrubaru et Anca Velicu(eds.), *Syntaxe et Énonciation ——Actes du XII e Séminaire de Didactique Universitaire, Constanta 2005* (Editura Echinox), 207–223.

White, P. R. R. (2003), "Beyond modality and hedging: A dialogic view of the language of intersubjective stance," *Text* 23: 2, 259–284.

ヴァインリヒ，ハラルト（1984）『言語とテクスト』脇阪豊他訳，紀伊国屋書店

バフチン，ミハイル（1988）「ことばのジャンル」佐々木寛訳『ことば　対話　テキスト』115–189.

バフチーン（1968）『ドストエフスキイ論——創作方法の諸問題』新谷敬三郎訳，冬樹社